

中村健之介・中村喜和・安井亮平・長縄光男 編訳
『宣教師ニコライの日記抄』

著者	川成 洋
出版者	法政大学大原社会問題研究所
雑誌名	大原社会問題研究所雑誌
巻	506
ページ	70-72
発行年	2001-01-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/8236

書 評 と 紹 介

中村健之介・中村喜和
安井亮平・長縄光男 編訳

『宣教師ニコライの日記抄』

評者：川成 洋

私事であるが、この夏、両親の墓参りのために、札幌郊外のカトリック墓地に出かけた。その墓地の隣に、ロシア十字架の立ち並ぶ墓地があった。ロシア正教の墓地である。大主教（総主教）の堂々とした墓碑を中心にかなりの墓石が立っていた。なかには、朽ちかかった木製の十字架も。墨で「神僕亜歴世……」などの洗礼名も書かれてあった。明治時代に亡くなったロシア正教の日本人信徒だけではなく、ロシア人聖職者とおぼしき墓も見うけられた。

たしかに、地域的に隣接していることもあって、北海道とロシアの関係は深い。ロシア使節ラックスマンが通商を求めて根室に来たのは、1792年。また、この年、最上徳内らが幕令をうけてカラフトなどを巡視した。本格的な日露関係は、明治維新以降となるが、開拓期の北海道は、キリスト教各派にとって、まさに「布教の草刈り場」でもあった。とくにカトリックとプロテスタント各派は、教会や伝道所はもとより、学校、病院、養老院、孤児院などの建設といった、社会的な活動にそれなりの成果をあげたが、ロシア正教は絶えず後塵を拝し、わずか函館のハリストス正教会くらいと思っていた私には、この墓地の規模といい、その年代の古さといい、

いささか驚きであった。

明治期の日本におけるロシア正教はどの程度の広がりを見せていたのだろうか。

東京神田のニコライ聖堂の建堂責任者であったニコライ大主教（1838～1912）は、実に50年間も（ほんの短期間、2回ほどロシアに帰国したことがあった）、日本でロシア正教の布教に専念し、1870年から1911年まで日記をしたためた。その膨大な日記の六割弱が、本書である。

本書は、宣教師ニコライの明治期日本でのロシア正教の受容史であり、かつ日露交渉史でもある。ことに上州と東北地方の巡回日記には、巡回先の全世帯数、信徒世帯数、信徒数など克明に記録され、信徒世帯数は全世帯のほぼ10パーセントを占めていた。これは信じ難い数値と言わねばならない（あのキリシタン禁制時代から現在まで、わが国のキリスト教信者は総人口の1パーセントにすぎない）。さらに外国人の目に映った日本の地方都市、農村の習慣や生活など、さながら民俗学のすぐれた観察記録である。

たとえば、1881年5月27日（足利にて）

「宿に帰っても長いこと周囲をうろつきまわっている信徒たちの姿が見える。それにしても、窓や戸の隙間という隙間から覗き見している連中には閉口だ。まるで檻の中の舶来の珍獣を見ているみたいだ」

1881年6月18日（湯瀬にて）

「農民は立派な野良から予期してしかるべき生活とは、まったく違った生活をしている。一軒の農家に立ち寄り、石臼を見せてもらった。これで外皮と実を別々にして、モミ（粳）〔ニコライは漢字も書き入れている〕から米を作るのである。老人は藁の縄を編み、老女は釜をかき回している。敷物の代わりに、すでに原形を

とどめ粗悪な筵で覆われた板の間。何もかも汚く粗野で、この上なく不快だ。そうでありながら、この家がとくに貧しいとも見えない。日本の田舎や、大きな街道からはずれたところでよく目にする土壁の小さなあばら屋については、何をかいわんやだ。ござを敷いたござっぱりした日本の小家屋が、日本人の生活の一般的なかたちだというのは、あたっていない。そうではないのだ」

実に率直な印象記である。また、カトリックやプロテスタントとの信者獲得競争も、いたるところに見うけられる。布教活動については、こう述懐している。

1881年6月10日（釜石にて）

「着飾った神参りの女たちのグループにいくつも出会った。……いたるところに、神参りの旅をしたいという欲求があることは注目に値する。キリスト教を庶民に根づかせるにあたっては、このような欲求のあることを考慮に入れられないわけにはいかない」

これは、フランシスコ・ザビエル以来のカトリック特有の頑な護教的姿勢、他宗教・多宗派への攻撃的な排撃とは全く異なり、日本人の伝統的な信仰心を尊重する立場がうかがえる。あのカトリック作家の遠藤周作が、日本人のサイズにあわないダブダブのキリスト教という洋服に喩えたが、すでにニコライはこの不調和に気づいていたというか、宗教的感性は相互に浸透しうる普遍的なもの、と了解していたのだった。

それにしても、ニコライの心痛は、なんといっても日露戦争の勃発であった。周囲のロシア人の帰国すべしという助言を排して、ただ独り日本にとどまり、稚い日本の正教会を護り、日本人の信徒に心の安らぎをもたらし、かつ（開戦前には予想だになかった）次々と日本に送られてくるロシア人捕虜（総計、約7万人）に「宗教的慰安」を与えるため、70近い老齢にも

かかわらず、それこそ八面六臂の大活躍をしたのである。

この日露戦争期にほとんど一日も欠かさず日記をつけていた。本書はその日記を全て収録している。

当時、日本政府はこの戦争は宗教とは無関係であるという見解を公にし、日本正教会を戦争の渦の外に置く方針で、ニコライや駿河台の正教会を警護した。それは有難迷惑とニコライが思うほど嚴重なものであった。だが、日本人の正教会の信徒たちは、たとえば戦闘的愛国主義を標榜する仏教の僧侶たちに攻撃されたり、あるいは全く根拠のないのに「露探（ロシアのスパイ）」と疑われ、周囲の日本人から村八分にされるといった受難が続いた。

こうした日本人の信徒達の迫害の報を受ける度にニコライは、さながら我が子の不幸を嘆きかつ怒り、また神学校で教えた日本人青年の戦死に際して、深い悲しみのなか死者追悼の祈りを捧げたりもした。こうしたニコライの心は日本人の信徒たちと一つになっていた。

だが、戦争が日増しにロシア側に不利となり、ロシア軍の敗北が現実のものとなるにつれ、ニコライの愛国心が疼き出す。

たとえば、1904年4月17日

「この不幸な戦争のことが頭から離れない。あらゆることに戦争が入りこんできて、何もかも駄目にしていく。愛国心もまた、自我の意識と同じように自然な感情なのだ。どうしてもないではないか。この苦しい、絶え間ない刺すような痛みを我慢しなければならない」

1905年6月4日

「司祭たちは、奉神礼の後、ロシア艦隊に対する輝かしい勝利に感謝の祈禱をした。わたしは至聖所にいて、わたしの哀れな屈辱の国のために祈った。戦争が始まって以来、大聖堂の鐘が中止されてよかった。ロシア製の鐘が日本の

勝利を祝うとしたら、さらにつらいことだったろう」

日露戦争終結期において、ニコライの心はロシアと日本の二つに分裂したものの、それでも、日露戦争期に東京で暮らしていたフランス人クーシューは日記に、「ニコライは独力でカトリックの宣教師達全員が成し遂げた以上多くの日本人をキリスト教に改宗させた」と無条件で称えている（平川祐弘『和魂洋才の系譜』）

ニコライは1906年4月、大主教に昇叙され、その6年後の1912年2月16日、駿河台の大聖堂で永眠した。享年75歳。

この前年の日本のハリストス正教会の現勢は、信徒31,984名、教会265、聖職者41名、聖歌隊指揮者15名、伝教者121名であった。

これは、ニコライの日記に述べられているように、「草鞋をはき、泥濘脚を没し頗る歩行に滞む」ような山道をたどって行ったニコライの「草の根伝道」の成果というべきであろう。（中村健之介・中村喜和・安井亮平・長縄光男編訳『宣教師ニコライの日記抄』北海道大学図書刊行会、2000年6月、568+xv頁、定価6500円+税）

（かわなり・よう 法政大学工学部教授）

賀川豊彦記念講座委員会編

『賀川豊彦から見た現代』

紹介：横関 至

本書はキリスト教徒であり社会運動家でもある賀川豊彦についての8本の講演を収録したも

のである。最初の3本は1988年の賀川豊彦誕生百年記念講演である。次の5本は1989年の第15回から1997年の第19回までの賀川豊彦記念講座委員会主催講演会での講演である。この賀川豊彦記念講座委員会は、「1960年、賀川豊彦の死去により米国カガワ・フェローシップ（賀川講演会）が解散した際に送られてきた活動資金をもって発足した」（236頁）ものである。

刊行の意図については、「あとがき」に次のように記されている。「本書が多くの読者に読まれ、思想的に空洞化し、混迷の度合いを深めつつある現代世界、特にこの国にあって、新たな示唆を与えるものとなるよう心から希う次第である」（238頁）と。

本書の構成は、次の通りである。

隅谷三喜男「まえがき」

武者小路公秀「人間性の探求としての平和」

三宅廉「いと小さき者と賀川豊彦」

大江健三郎「信仰を持たないものの側から何ができるか」

坂本義和「いま、平和とは」

森静朗「賀川豊彦と世界通貨 ECの通貨政策」

磯村英一「いま、なぜ賀川豊彦なのか 現代に生きる賀川豊彦」

高村勲「賀川豊彦と生協運動 現代に生きる賀川精神を生協運動に見る」

日野原重明「いま賀川先生が再現されたら何を語るか」

金井信一郎「あとがき」

評者はかねてより賀川豊彦と社会運動の関わりに関心をもってきた。そして、その活動の多面性、労働運動・農民運動の関わり、「革命的」発想、共産主義批判と新たな社会改革の提示、「神の国」運動の意義等について言及してきた（拙稿「キリスト教徒賀川豊彦の革命論と日本農民組合創立」『大原社会問題研究所雑誌』421

号，1993年12月号及び「賀川豊彦と日本基督教連盟の『社会信条』(上)」『大原社会問題研究所雑誌』433号，1994年12月号。「賀川豊彦と日本基督教連盟の『社会信条』(下)」『大原社会問題研究所雑誌』434号，1995年1月号)。これらを踏まえて，本書を検討していこう。

まず，注目すべき賀川観がいくつか提示されている。

1つは，賀川の「友愛の経済学」と世界平和との関わりである。森静朗氏は，賀川の議論について，「世界の平和あるいは国際平和を築く基礎は，第一に自立であり，第二に協同であり，第三に連帯である，と強調します。彼の頭にある『友愛の経済学』によって，協同組合的な世界を作っていくことが世界平和を導いていくのだという発想であります」(147頁)と把握されている。

2つは，賀川が資本主義・共産主義を批判し「第三の道」を提起したことである。「友愛を基礎とする協同組合運動こそ第三の道につながる」(150頁)という発想や，「協同組合的な世界経済同盟」(146頁)や「協同組合国家の建設」(164頁)さらには「世界連邦」(95 - 97頁)という構想が提示されている。

3つめは，金融についての捉え方である。森静朗氏は「次に賀川は，他の宗教者と違って金融というものを非常に高く評価しております。言葉を変えますと，金融というものは社会を動かす血液である。『金融とは文明の血液』と見ていることです」(146頁)と紹介された。この点に関して，「愛は通貨である」という表現(155頁)や通貨の再評価の必要(158頁)等にも言及されている。武者小路公秀氏も，生活協同組合運動に関連して，「お金の世界というものの実質を無視するのではなく，むしろそれをもっと健全な形にしていこう」という発想(30頁)に着目されている。

4つめは，賀川の医者論・看護婦論である。医師の三宅廉氏は次のように紹介されている。「賀川先生の医師観というものは峻烈でした。そして日本の医師は唯物的だ，機械的だと，よく言いました。こんなに恐ろしいことはない」(61頁)。さらに，「日本の医者はもっと人間の命を尊重してくれないか，神様から与えられた命です。十字架の愛をもって治療するような，そして喜んで奉仕するような医者が出てくれないか，とよく言われました」(62頁)と。また，賀川の『看護婦崇拜論』の意義に触れ，「これほど看護婦を褒めたたえた人は世界にいないでしょう」(63頁)と評されている。同じく医師の日野原重明氏は賀川が「予防医学を推進」(229頁)するよう主張し，「病人を扱うシステム論」を提示(229頁)したことを紹介している。この賀川の医者論・看護婦論は，賀川の活動の基底にある人間観を検討していく上で，興味深い素材である。

5つめは，文学史での位置づけについての大江健三郎氏の評価である。大江氏は，「日本近現代文学史の中で多くのまじめな人々に読まれた作家が無視される傾向にあります」として，「大正の初めの日本で，貧しい生活をしていた人々の生活をイキイキと描いた詩と小説をあげるならば，私は賀川豊彦をまず第一にあげなければならないと思います」(80頁)と論じた。こうした視点から作家としての賀川豊彦を再検討する作業が，今後必要となろう。

このように，賀川の活動の多面性，その議論・活動の現代的意義について，様々な角度から検討が加えられている。ただ，次の問題の解明は残されていると言わねばならない。それは，「まえがき」で言及されている「戦争中の言論については問題がなかったわけではない」(5頁)という問題や差別問題(6 - 7頁)である。本書においても，大江講演(92 - 95頁)や磯村

講演（176頁，181頁）等で言及されている。しかし、差別問題、戦争責任問題について本格的には論じられていない。「戦争中の言論」について論じた業績も紹介されていない。なにが論点であったのか、どんな言説が問題点として指摘されたのか、何故賀川が差別者とみなされたのか、差別者と断ずる側の論理と実証はなにか、どんな研究文献があるのか等を提示し、判断の材料を明示することが必要であったろう。さもないと、問題点を深く掘り下げずに一方的に賀川を賛美しているだけではないかという批判に対処できなくなるであろう。

ところで、本書において講演者によって賀川の「友愛の経済学」をどのように評価するかについて、評価が大きく異なっている。隅谷三喜男氏は、「そのような賀川の多面性と独自性は、時に軌道を、特に理論的分野ではずれることがある」（6頁）とみなし、「経済学者は理論的分野に全く関心を寄せないのである」（6頁）と断定される。賀川の著書『主観経済の原理』について、「唯心的な経済哲学を論じるが、経済の原理にはなっていないと言ってよい。したがって彼の社会運動の原理としては傾聴に値する点もあるが、経済学者は賀川理論に全く関心を寄せないのである」（6頁）と。これにたいし、賀川理論に関心を寄せている経済学者の森静朗氏は、前に紹介したように、賀川の「友愛の経済学」に高い評価を与え現代に継承すべきものとして注目されている。また、医師の日野原重明氏も「賀川先生に非常に感銘を受けたのは」「経済理論を友愛ということで解決しようという発想をされたことです。これは特記すべきことであります」（230頁）とされた。「もっと言うと、キリスト教的な兄弟愛と経済改造を結びつけられたことで、それがないと経済の改造は難しいと」（同上）。このように、賀川を評価する人々のなかにも賀川の議論の核心をなす「友

愛の経済学」の位置づけをめぐって大きな食い違いが存在していることが、鮮明に示された。これだけでも、本書刊行の意義はあると言って過言でない。賀川の理論の全体像の解明、賀川の理論の全面的検討が必要なことを示している。

最後に、本書の構成について、幾つかの注文を出しておきたい。

まず、講演の中で引用されている賀川の言説については、引用文献と全集の収録巻数を明示すべきであったのではなかろうか。賀川についての議論を活発にしていくなためにも、賀川についてもっと知りたいと考えている人々のためにも、典拠の明示は必要不可欠であったろう。次に、賀川の略年譜を掲載すべきではなかったろうか。その活動の多面性を知るためには是非とも必要であったろう。本書に収録されている講演の内容を理解する上でも、不可欠である。幾人かの研究者によって作成された年表が既に存在しているのであるから、難しい仕事ではなかったはずである。第3に、どのように学んで行くかの手引となる本、この間の研究成果、そして賀川豊彦についての研究団体等を紹介してほしいかった。

「新たな示唆を与えるものとなるよう心から希う次第である」（238頁）という本書の刊行の意図からしても、これらの点についての配慮はあって然るべきであったろう。

（賀川豊彦記念講座委員会編『賀川豊彦から見た現代』教文館，1999年，238頁，1800円）

（よこぜき・いたる 法政大学大原社会問題研究所
兼任研究員）